美術品修復の現場から

愛する娘に添えたバラの花

吉備国際大教授
下山　進氏

日本では西洋絵画を見る機会がほとんどなかった大正時代、児島虎次郎（1881～1929）は、実業家の大原孫三郎氏（1880～1943）の経済的援助を受けながらヨーロッパで自らの足と目で、モネ、マチス、エル・グレコ、ゴーギャン、ミレーといった巨匠たちの名画を集め、日本に紹介した人として広く知られています。彼には日本で絵を学ぶ若者たちに、本物の西洋絵画を紹介したいという強い思いがあったからです。

◆「万有は死す……」

虎次郎が収集した油絵の中に25年の歳月をかけて制作された大作が含まれています。それは、彼が1923（大正12）年に第一次世界大戦の傷跡が生々しく残っていたベルギーのブリュッセルで直接購入したレオン・フレデリックの「万有は死す、されど神の愛は万有をして蘇らしめん」です。

この油絵は、7枚続きで全長が11㍍もあります。神の怒りによって人類が炎の中で死に絶える左側3枚の絵、そこに神の使いとして白い鳩が福音をもたらす中央の絵、そして残る右側の3枚には、大きな虹を背景にして神の愛のもとで人々が復活する姿が描かれ、その中に4人の少女に囲まれたレオンの娘も描かれています。

レオン・フレデリック「万有は死す、されど神の愛は万有をして蘇らしめん」に描かれている4人の少女に囲まれたガブリエル

紫外線を吸収して黒く沈むバラの花

櫓が組まれた大原美術館本館2階の調査現場＝03年3月20日

紫外線を照射しながら絵画表面を観察する筆者

◆世界大戦終結時に制作

この復活の場面は、第一次世界大戦が終わりを迎える1917年から翌18年にかけて制作されました。レオンは、この戦争で最愛の娘ガブリエルを喪っているのです。

この絵だけはそばに残しておきたかったレオンに、虎次郎は頼み込んで譲り受けたといいます。

レオンは、この絵がよほど気になったのでしょう、帰国する虎次郎を追いかけるように、「私が描いた絵の中で一番愛着のある絵にもう二度と会えないだろう。約束したように日本で私の絵のカラー写真を撮ったらすぐに送ってもらいたい。どうか末永く私の絵を可愛がってやって欲しい」と日本へ手紙を出しています。

◆紫外線で光学調査

この絵には、数々のエピソードがあります。その一つに、レオンが虎次郎に絵を渡すとき、娘ガブリエルの周りに花を描き添えたという話が残されています。本当に描き込まれているのでしょうか、私は紫外線を照射して絵の表面を観察する光学調査を行ってみました。

2003年3月20日、閉館後の美術館に櫓を組み上げ、床から約2㍍の高さに展示されている「万有は死す」の調査を行ったのです。紫外線を照射しながら絵画表面を観察していきました。すると、座った姿のガブリエルの右ひじのそばと右足のひざの上の部分に描かれているバラの花が黒く沈んだのです。油絵に紫外線を照射して観察すると後から絵の具を補った部分（補彩部分）や描き加えた部分は、紫外線が吸収されて黒く沈んで見えます。このことから、伝えられてきた「花を後から添えた」話は事実だったのです。

◆思い込めた〝プレゼント〟

現場に立ち会った原道彦氏（当時の副館長）は「思いを込めた作品が日本に行ってしまう、二度と会えない。だから父親のレオンはバラの花を最後に描き加えプレゼントしたのでしょう」と話されていましたが、この絵に込められた作者の思いが解き明かされた瞬間でした。

レオンが終生気にかけていたこの7枚の絵は、その大きさに合わせて建てられた大原美術館本館の2階に今も展示されています。レオンが愛した娘ガブリエルの姿をぜひご覧ください。そのそばには、「愛する娘ガブリエルのために！」とレオンの言葉が書かれています。

きび談語

車のエンジンから異音がして、JAF（日本自動車連盟）に電話をかけた時のこと。「会員の有効期限が切れてますね。夜間基本料と作業料で1万1200円かかります よ」。迷った末に出費が惜しくて電話を切ると、異音も間もなく止まった▲調べてみると、民間会社のJRS（日本ロードサービス）は年会費2100円で、会員は公称400万人超。非会員の実費もJAFより割安だ。サービスも多種多様で、知らずに損をしていた▲それにしても解せないのは、社団法人・JAFの高額な実費。本部は「全国一律サービスという安心料です」と歯切れが悪い。ロードサービス部門は、郵政のついでに民営化してみたらどうだろう。

【薄田賢史】